

# セグメント報告に関する動向

IASB テクニカル・フェロー おおつ たかあき  
**大津 喬章**

## はじめに

今回は、IFRS 第8号「事業セグメント」（以下「IFRS 第8号」という。）に関するプロジェクトの概要をまとめたプロジェクト・サマリーについて、当該プロジェクトの経緯も含めご報告した。その中で、2018年3月に国際会計基準審議会（IASB）が、2017年3月に公表した公開草案「IFRS 第8号の改善」（IFRS 第8号及びIAS 第34号）<sup>1</sup>で提案された改訂案はいずれも採用しないという決定を行ったことをご報告したが、今回は、それ以降のセグメント報告に関する国際的な動向をご報告したい。なお、文中の意見にわたる部分はすべて筆者の個人的見解である。

## IASB での検討

前述のように、IASBはIFRS第8号の改訂を行わないことを決定したが、一部の財務諸表利用者からは、企業がセグメント報告を行うにあたり、「より多くの列と行（more columns and more rows）」を開示すべきという声をよく耳にする。この言葉は、企業が、報告セグメントに関する情報を以下のような表形式により開示することを前提にした言葉であり、より多くの報告セグメント（列）及び開示科目（行）を開示し、開示の充実を図るべきという財務諸表利用者の声を表していると考えている。

### （表形式により開示する例）

	セグメント A	セグメント B	セグメント C	その他	調整	連結計
売上収益						
外部収益						
セグメント間収益						
収益合計						
報告セグメント利益						

1 公開草案「IFRS 第8号の改善」（IFRS 第8号及びIAS 第34号）<https://www.ifrs.org/-/media/project/improvements-to-ifs-8-operating-segments/exposure-draft/published-documents/ed-proposed-amendments-ifs8-ias34.pdf>

この言葉の背景としてあるのは、財務諸表利用者が、事業セグメントから報告セグメントへの集約の際に、企業が必要以上にセグメントを集約しているのではないかといった疑念や、各報告セグメントの業績などを評価する際に、必要な情報が開示されていないといった不満を持っていることが考えられる。この「列」と「行」という2つの視点に着目しながら、これ以降、IASBにおけるセグメント報告に関連するプロジェクト及び米国財務会計基準審議会(FASB)が現在検討しているセグメント報告プロジェクトを見ていきたい。

IASBでは、現在アジェンダにセグメント報告に関するプロジェクトはないが、基本財務諸表プロジェクト及びのれん及び減損プロジェクトにおいて、セグメント報告に関連する意見を入手しているためここでご紹介したい。

IASBは、のれん及び減損プロジェクトにおいて、企業の実施した企業結合が良い投資であったかどうか、そして、購入後、そのビジネスが当初の想定どおりの業績を達成しているかどうかを財務諸表利用者が評価できるようにするため、開示の要求事項の改訂を現在検討している。当該開示の検討にあたり、IASBは一部の利害関係者から、企業結合単位の投資の評価では、取得企業が有する既存の事業と企業結合により取得した事業との統合によってその評価が困難となるため、セグメントに基づいた評価をすることで、より俯瞰的に投資を評価をすべきという意見を聞いている。この意見は、企業結合に関する開示を、先程の「列」という視点から考察していると考えており、前述の「より多くの列」を開示すべきという一部の財務諸表利用者の意見も勘案すると、企業結合のより良い開示は、セグメント報告と関連させて考察する必要性があると筆者は考えている。

また、基本財務諸表プロジェクトの調査活動段階において、IASBは、セグメント報告にお

ける比較可能性を向上するために、表示科目及び小計を開示項目として追加すべきという意見を受けた。これは、前述の「行」、すなわちセグメント報告における表示科目の充実に関する意見を、基本財務諸表の視点からも入手していたことになる。しかしながら、セグメント報告におけるこれらの検討事項を基本財務諸表プロジェクトに含めることで、基本財務諸表プロジェクト自体が遅延することになるため、IASBは最終的に基本財務諸表プロジェクトにセグメント報告の検討を含めないこととした。ただ、当該プロジェクトにおいて、基本財務諸表の追加の表示科目及び小計が今後決定されることになれば、基本財務諸表で検討された事項も勘案して、セグメント報告における「行」の検討がなされるべきではないかと筆者は考えている。

このように、セグメント報告の改善について、IASBは、現在検討している他のプロジェクトにおいても意見を聞いており、財務諸表利用者のセグメント報告の重要性は高いと考えている。

## FASBでの検討

一方で、FASBは、前述した「列」及び「行」という2つの点からセグメント報告の改善を現在検討している。「列」の改善という点から、FASBは、事業セグメントから報告セグメントへの集約要件をなくすことや、報告セグメントを決定するまでの過程を見直すことを提案している。当該提案の実務への影響を検討するために、FASBは2018年下期において財務諸表作成者を含めた調査活動を実施した。この調査活動を踏まえて、2018年12月に、FASBは前述の提案の実行可能性を検討したが、提案された改善策では、費用対効果の点からより良

い改善にはならないという意見が聞かれた。また、「より多くの列」を実現するためには、集約要件の改善のみではなく、CODM<sup>2</sup>の識別や事業セグメントの定義など、セグメント報告におけるより根本的な考え方の再検討も必要なのではないかといった意見も聞かれたが、当該会議では何も決議されていない。

また、FASBは、「行」の改善という点から、セグメント報告の表示科目を追加することなどを企業に求めることを検討している。これらの提案についても、今後実務への影響を検討することにしており、「列」に関連した改善案を検討することを予定している。

## おわりに

FASBは、2016年に実施したアジェンダ・コンサルテーションを契機として、セグメント報告プロジェクトを再始動することを決定した。このような経緯を考えると、IASBにおいても次回のアジェンダ・コンサルテーションにおいて、再度検討を開始する可能性もある。ただ、その一方で、IASBにおける他のプロジェクト（基本財務諸表プロジェクト並びにのれん及び減損プロジェクト）におけるセグメント報告の議論やFASBの検討状況によっては、セグメント報告の改善について、再度IASBでも検討を開始する必要があると筆者は考えている。

---

2 Chief Operating Decision Maker（最高経営意思決定者）の略であり、IFRS第8号第7項において、当該用語は「機能を示すものであり、必ずしも特定の肩書を有する経営者ではない」とされており、「その機能は企業の事業セグメントに資源を配分し、その業績を評価することにある」とされている。